

宣言書

日本の資本主義は、歐州大戦直後を頂點として、次第に崩壊過程を辿つてゐる。しかし乍ら資本主義の崩壊は日本國家の沈没ではない。日本はあらゆる進歩、卓越せる經濟制度と政治組織を採用して、不斷に進運向上して止まざる國家である。こゝに日本が世界に冠絶せる國民であることを誇り得るのである。

しかるに國家と資本主義とを、同列に置き、その間に隔れて私利を守らんとする特權階級の存在することを暴露せなければならぬ。これと共に、この一面のみを見て、國家と資本主義を同一視し、傳統久しき日本國家を腐蝕せしめんとする左翼小兒病の近視眼に對しては、日本國民の敵として粉砕せなければならぬのである。

しかし乍ら労働階級の眞面目なる苦闘や既に久しい。幾度か熱湯を呑み、幾度か裏切られた我等は、曾て日本の國民性を信じ日本の上層階級の道義心に期待した。しかし乍らそれによつて労働階級の解放も向上も期せられない。行詰れる經濟組織の改革も、日本國家のために何等乗身の躍進も見ることが出来なかつた。

普通選挙はまた我等に絶望を與へた。依然として黄金がソレを支配することを知つたのである。而して共產主義、サンジカリズム、社会主義、アナキズム、國家社会主義、ファシズムは、日本の労働者をして一階級者の前に於けるモルモット以上のものとはせず、労働階級の先進分子たる組織労働者は、コノために、孤立抗爭、七化八裂の儘を極めたのである。

この渦中に憫む労働階級は、昭和六年九月十八日の滿洲事變を契機として、擡頭せる反資本主義愛國運動に、また期待するところがあつたのである。然るに之亦資本本の攻勢を受け、骨抜きとなり、昭和七年末より次第に衰退を続けつゝある。

しかし乍ら、見よ、之等特權階級の死力を盡しての攻勢また攻勢によつて、幾度か我等の陣営は後退を餘儀なくされた。それにも拘らず資本主義は次第に崩壊の過程を辿つてゐるではないか。しかも、かすかに響く我等の進歩の行進喇叭は既に力強く我等の耳を打ちつゝあるではないか。

我等は過去の輕微浮薄を斥けて、飽く迄も堅實に進まなければならぬ。我が日本労働組合總聯合の如き、既に早くよりその點を指摘して嵐を衝いて來たのであるが、今や進歩の門出に當り、益々我等の使命重大なるを痛感するものである。即ち我等は強烈なる戰闘的精神を養ふと共に、また産業人としての自覺を深めなければならぬのである。

労働者が産業人としての自覺がないならば、資本家の横暴は痛弊し得ても、自ら代つてその經營の局には當り得ないのである。労働組合運動は飽くも自主的に、確信に満てる運動でなければならぬ。生産者としての充實した信念こそが、初めて労働條件の維持向上は勿論、その根本的な改革の迫力となるのである。

我等は最早や空疎なるデモゴグの言葉に惑はされることなく、只管産業人としての自覺を深め「労働組合主義の徹底」を期し、進んでなほ統一ならざる日本の「労働組合戰線統一」の完成を期さなければならぬのである。

全國の同志諸君!! 我等は昭和九年年度全國大會に際し宣言す。我等は國際平和を愛し、國際間に於ける労働者相互の協力をなすは勿論であるが、日本國家の健全なる發達を阻害する一切のものと抗爭するものである。資本主義は國民の間に生産無産の階級對立を生じ、國民の協力を破壊せしめるのみならず、今日に於ては労働階級の生活を保障し得ず、しかも、遂に經濟不況を克服し得ないのである。かくては今こそ世界は十字街頭に陥んでゐるが、日本の將來を恐るゝものである。我等は茲に敢然として現産業組織に改造を加へ、統制ある産業組織の確立に努力するものである。

而してその方法は、飽くも日本の國情に即せる労働組合主義に立脚し、能ふ限り平和的に、産業協力の精神によつて邁進せんことを期するのである。

昭和九年十月十四日